

第十三章 うごめく思惑

〳〳〳ハルビンの街かど〳〳〳

ハルビンとは現地の言葉で網を干す場所を言うらしい。元々は松花江の川岸で漁をする人々が暮らす漁村だった。

ハルビンの様相が変わったのは十八世紀に不凍港を求めて南下してきた帝政ロシアが、大連とシベリア鉄道をつなぐ東清鉄道を作る拠点としてハルビンに目を付けたからだ。オホーツク海からアムール川を船で遡上して、ハルビンに鉄道建設の資材を運び込む川の港だった。

このロシアの南下は極東アジアに脅威を与え、日露戦争で敗戦したことにより帝政ロシアの夢はついでたが、その後疲弊した帝政ロシアはレーニンによる社会主義革命により、ロマノフ王朝が惨殺されその歴史を閉じた。

新京(今の長春)から大連まではポーツマス条約締結の時に日本に譲渡され南満州鉄道となっていたが、新京より北はまだソ連が経営権を握っており、満州帝国成立後の千九百三十五年にソ連は北満州鉄道を満州国に売却した。

ハルビンの街は伊藤博文が暗殺されたハルビン駅から北西に松花江の川岸までが開けた市街地で、道理区などと呼ばれている。

駅より東、松花江の下流には道外区と呼ばれる現地人の街になり、足を踏み込めない汚い街が作られていた。

萌ゆる大空軍曹はハルビンの市の警備を命じられ二人の部下を連れて赴いていた。

こんなところに邦人がいるわけはないとわかっていても、道外区の巡回をせねばならなかった。汚い街、腐った臭い、アヘン窟。この世の邪悪のすべてが寄り集まったような街に思えた。

死んだ人間の遺体はゴミ置き場に積まれ、その衣服を住民がはぎ取って行く。地獄のような光景が日々繰り返されていた。

ようやく道外区の巡視を終えて駅に向かって歩いて行くと、李香蘭のリサイタルのポスターが貼られていた。

萌ゆる大空軍曹に帯同していた二人の部下は実は血を分けた兄弟で、弟が養子に出されたために姓が違っていた。偶然にも同じ部隊に兄弟が配属されたのであった。

離れて育つても兄弟とは似通るものなのだ、と、ポスターに見入る二人を眺めている軍曹だった。

「兄貴、俺ならもう少し若い娘たちを集めて、育っていく過程も客に見せて興行したいなあ。」

「俺はもう少し見栄えが良い女優を集めたいと思う。」

兄の名は乃木坂四六、弟は秋葉四八と言った。

「乃木坂一等兵、秋葉二等兵、いつまでも油売つてると日が暮れるぞ。兵舎に戻るぞ。」
二人の部下は萌ゆる大空軍曹の後に続いて道理区に向かって歩いて行った。

〜陸軍省では〜

一方、その頃市ヶ谷の陸軍参謀室では作戦会議が終わった会議室にとろろん娘が掃除に入っていた。参謀室のテーブルには先ほどまで開かれていた師団の配置が大きな地図の上に置かれていた。

「あ、これや軍人将棋でやねえやんか？」

とろろん娘は子供の頃、兄たちが近所の子供たちと夢中になって遊んでいた将棋のことを思い出した。とろろん娘は女の子だからと仲間に入れてもらえなかったが、大将や大佐などの階級や、タンク、スパイ、地雷、工兵、飛行機などそれぞれがどれに強く、どれかに弱いなど上下関係や技能での強弱が決まっていた。

「中佐と大尉ってどっちが強いんだっけ？」

ふと、自分が働いている環境を思い浮かべると、現場が近い分大尉の方が強そうに思えてきた。

「戦車もあるんだ！」

会議と称してこんなことをして遊んでいたのか？と地図に置かれた駒をいじって遊んでしまった。掃除が終わると台帳に署名をするのだが見当たらない。入り口のそばの棚にそれらしい台帳が開かれていた。

「やっぱ偉くなるつちゅや違うなあ。自分で掃除もしてるんだ。」

台帳には将校の名前が並んでいた。その末尾に空欄があったので自分の役職と名前を書いて会議室を出た。

「辻作戦参謀長。今後における部隊配置が確定しました。」

「そうか、さっそく各師団に打電せよ。」

確認もせず偉そうにふんずりかえっている辻政信参謀だった。

「ご確認なさらないのですか？」

「貴様ら低能の考えることなどたかが知れてる。見るまでもないわい。」

毎度の人を見下した態度に、少佐の階級章を付けた作戦参謀はムカツとしたが、

「少尉、さっそく作戦室の地図にある配置を各隊に打電せよ。」

と、部屋を出て行ってしまった。少尉はとろろん娘が軍人将棋と間違えて勝手にいじった配置図を見て、

「なんて斬新な作戦なんだ！」

と即座に各地に打電した。

「あ、満州視察旅行の人員表をどっかに忘れてきちゃった。会議室だったかな？」

と、会議室に戻ってきた東条英機は、掃除の検印書と間違えたとろろん娘が、自分の名前を書き込んでいることにも気が付かず

「あったあった。重要書類。」

と持ち帰ってしまった。

事務所で経費の計算をしているとろろん娘の元に、満州視察団に帯同するよう指令が出たのは二日後のことだった。

満州視察団で大陸に渡る前にとろろん娘は龍笛家を訪問した。

「視察団に選ばれるなんて大したもんじゃない！」
「とんでもない。雑用と小間使いさあ。」
お能ちゃんが瀬戸内の小島で教師として頑張っている話しや、武尊君が予科練を受ける話などを聞いて、自分も頑張らねば！と気持ちに張りができたとろろん娘であった。

〳〳北京〳〳

シヨウ・チャンツーと赤井五平は北京の天安門付近の食堂で一杯飲んでた。もはや誰の目にも現地民にしか見えなかつた。この日、シヨウ・チャンツーは長い辮髪を結っていたが、短期間でそんなに髪の毛が伸びるわけではない。そうでなくても………まつ、いいか。

「拳がグーで、掌がパーやったかな？逆か？チョキはどないなんねん。」
赤いウーピンはまた迷宮に迷い込んでた。

「おお、マチ姐さん。よく来てくれた。」
年甲斐にもなく、長いスカートのスケバン女子高生の制服姿で、頭の両側に拳大に髪を束ねたツインテール姿でやってきた。手にはヨーヨー。風魔忍者のマチ姐さんだった。

シヨウ・チャンツー達は日本に工作活動を仕掛けている女スパイについて調査していた。ある時は日本人、ある時は台湾人、またある時は中国人。中国人なら国民党なのか八路軍なのか？はたしてその実態が何者なのかを調べていた。

「あら、師匠。今日は辮髪なの？満人みたいね。」
「うん。吸盤で張り付くんだ。ほれ！」
と頭から辮髪を外すと食堂の客が一斉にこちら注目した。
「だめよ、目につくじゃない。」

マチ姐さんは足取りを追っていた謎の女スパイが大連に向かった情報をつかんできた。
「私が調べたところでは、あの女の祖母と言う人物が日本軍に随分支援しているみたいよ。陸軍に戦闘機まで寄付しているつて。軍にも内通者がいるようね。」

「何者なんだね？その婆さんは？」
「陳とか言うタバコ屋の婆さんんだけど、タバコの利権を独占したみたいね。」
「独占も何も、そんなものやりたい放題のこの国じゃないか。タバコ利権程度で戦闘機とは。そういえばそれらしき人物の息子に上海でお目にかかったことがある。謝とか言う貿易商だった。須田のオジキのキャバレー・サンケイによく来ていたはずだ。」

「日本軍に通じているように見せかけてどこかにつながっている。この国じゃよくあることだわ。」

「敵にしても味方にしても野放しにしてはいけない一家のようだな。」
「それなのよ。その娘は今東京から北京に来ているんだけど、接触しているのが八路軍らしいのよ。」

「共産党员か？名前は？」
「立場を明確にしているわけではなさそうだけど、国民党にも八路にもつながっていて、日本にはあだ花以外の何物でもないわ。名前は蓮舫。」
「始末しとくに越したことはないな。大連か。」
「飛騨忍者の末裔を助っ人に頼んでおいたわよ。」

「で、グーが掌で、パーが拳やったな。逆か？チョコキはどないなんねん。」

赤井五平は北京の胡同（フートン）と呼ばれる長屋街に行き、麻雀をしながら蓮舫に関する情報を集め、同時に、この女が漢民族を欺く漢奸（カンカン）だと情報を流した。

シヨウ・チャンツーとマチ姐さんは北京の東南にある通州と呼ばれる地区にいた。

シヨウ・チャンツーが北京に派遣されてほどなく盧溝橋事件が起き日中戦争は泥沼に入り込むことになる。七月七日のことだった。

シヨウ・チャンツー達日本軍が盧溝橋に気を取られている時、軍が留守になっている通州の日本人街が支那人暴徒に襲撃された。治安を守っていたのは警官一人だった。

殺された日本人は手足や首をもがれ、妊婦は腹を裂かれ、女性は陰部を切り裂かれ石を詰められ、二百人を超える死体が転がっていた。皆民間人である。

おおよそ日本ではありえない虐殺の光景であったが、中国の戦争とはこういうものである。暴徒を手引きしたのは日本人名を持つ朝鮮人だったと言う。

その現場を目撃した日本兵たちはみな思ったと言う。中国人を皆殺しにしてやる。

小規模な衝突が起きては不利になると講和を申し出てきて、一件落着かと思うと別の場所で襲撃してくる。今度は違う政府なので関係がないとしらばづくれる。

このやり方が今も昔も彼らの手段だ。

怒りに震えるシヨウ・チャンツーに出た指令は特務機関に入り中国人を装い情報集首都工作活動をする事だった。

「メギツネが日本に向かう前に始末しておかなければならないな。」

三人は天津から船で大連に向かった。

陸地測量部

陸軍参謀本部外局、陸地測量部が中島飛行機に依頼していた新型測量飛行機が完成した。フルカワ先生は分解して運べる機体を完成させ、千葉の宵宵先生は広大な満州を給油なしで飛行可能なエンジンを作り上げていた。

「もしかしてあなたは国防雄弁大会ば出ていた、お能ちゃんのお友達じゃかなと？」

陸軍省の中で安徳君は意外な人と再会した。

「ああ、うんじゅやあ、帝国大学ぬ学生さん。応援本当かいありがとございました。」

「ひよつとして陸軍省にお努めやかあ？」

「ハイ。くま(こ)で事務ぬ仕事をしとります。」

「毎日同じ場所で仕事ばしとって、全然気がつかなかったばい！」

普通ならこうした再会の場で会ったら「奇遇ですな」とかなんとか言っちゃって口説くもんですが、それができるようでは朴念仁とは呼ばれない。千載一遇のチャンスをももの見事に素通りしてしまう安徳君ととろろん娘であった。

陸地測量部では新型測量飛行機を分解して船で大連まで運び、そこから黒竜江省のハルビンまで鉄道を使つて輸送。ハルビンの空港近くの工場を組み立てて試験をする計画だった。

既に陸軍の航空機担当の技術者は現地入りしており、中島飛行機からもフルカワ・宵宵両先生が現地入りすることになっていた。南満州鉄道に勤務している屋島君に再会できるだろうか？安徳君にとつて満州行きはもう一つの楽しみもあった。

〳〳重慶では〳〳

その頃、重慶の制圧部隊として村々を回つて、砲撃で崩れた法面の修復作業を指揮していた未造技師は突然駐屯地に呼び出された。

大本営からの指令で、満州に行つて関東軍を補佐せよと命令を受けた。何をどう補佐するのか？駐屯地としても皆目見当つかない話だった。

原因は作戦会議室でとろん娘が軍人将棋と間違えていじくりまわした配置表だった。

「大本営からの指令だ。何をやるのかわからぬが、向うに行つて指示に従え！」わけのわからぬまま未造技師は上海まで戻され、船に乗せられて大連に向かった。

〳〳大阪では〳〳

大阪の松山座事務所では大陸興行をしている大衆プロレス松山座満州応援観戦ツアーの抽選会が行われていた。

「鯉のから揚げ 夢シバキ セリフひとつ憶えちゃいないイ」歌つて踊れるプロレスラー松山勘十郎座長がリング上で日舞を舞いながら歌う「夢シバキ」はミリオンセラーの大ヒットとなり、一気におばさま方のファンが増えたのであった。

人気レスラーがリングに上がるとおひねりが飛び交うのだが、硬貨はレスラーに当たると痛いからお札に限定され、リングから戻るスバル選手はお稻荷さんの周りに差し込まれるおひねりが、おばさま方のお稻荷信仰の強さを示していた。

仕掛けたのは宝塚歌劇団の菊宗政監督だった。

現代で言うなら韓流ドラマブームの頃のヨン様ツアーのようなもので、豪華お食事付き夢の寝台列車で行く満州プロレス観戦ツアー、李香蘭のリサイタルがオマケ。

前夜からの徹夜組もいる状況、獄門島で知り合った帰依住職にお稻荷さんスーププレクスのことを聞いたほおでえ看護師もこの長蛇の列に並んでいた。

「あらあ、名古屋の帰依さんじゃないの。何こんなとこ並んどのの？」

菊宗政監督だった。菊宗政監督は松山座事務所に打ち合わせに行く途中だった。

「こんなとこに並んどのらんで、こつちこつち。」

と菊宗政監督に手招きされた。

「おみやあさんなんぞツテがあるのかなも。」

「私を誰や思うとうんねん。」

と、帰依住職とほおでえさんを松山座の事務所連れて行った。

販売開始前にチケットゲット。しかも特等席。龍笛さんが描いたポスターとパンフレットもサービス。世の中なんてこんなもんなんです。

「ほお。看護婦はんでつか？怪我が心配な興行やさかい、おつてくれはるとホンマ助かりま

んねん。」

オフィスのスタッフはほおでえさんが看護師であることを大変喜んでいた。

「お寺さんもおんねんけどな。」

菊宗政監督が言うとうと、

「え？まあ、お世話になることはないと思いますが……ありがたいことです。」

〳〳新義州の事故〳〳

朝鮮と満州の境を流れる鴨緑江。現在で言うなら中朝国境であるが、当時は日本と満州の国境であった。鴨緑江を挟んで大陸側が丹東、半島側が新義州となっている。

熊本の連隊の補充要員として朝鮮半島に配属になった阿保野論気二等兵であったが、勇猛果敢で名をはせる熊本連隊からはじき出され、国境警護の任に当たっていた。

自転車に乗ることには長けていた阿保野論気二等兵であるが、自動車の運転は経験がなかった。そのため、夜になると鴨緑江近くの空き地で軍用トラックの運転の練習をしていた。

暗闇に紛れて鴨緑江を手漕ぎボートで渡つて来る人影があつた。大陸から半島に工作を仕掛けに来た抗日パルチザンの一団だった。川を渡つて半島側の陸地に上がると、阿保野論気二等兵が運転の練習していた軍用トラックが停まつていた。

トラックのギアの入れ方がよく理解できず、助手席の兵隊に教えを乞うている阿保野論気二等兵が運転席にいた。

「あのトラックを奪つて市内に突入するニダ！」

抗日パルチザンたちはトラックの背後から忍び寄ると、いきなりトラックが急発進で後ろに下がり、荷台の真後ろにいた男をブチユと踏みつぶした。

「アツ！ニダ。」

「気づかれたニダ！すぐ逃げるニダ！」

「金同志がひかれたニダ！」

「しかたないニダ！とにかく逃げるニダ！」

パルチザンたちはいつせいに手漕ぎボートに乗り込み丹東側へと逃げた。

「阿保野二等兵！なにをやつてんだ！ギアが違うだろ！」

「川に落ちるかと思いました。そぎゃんことより、なんぞ踏んだ気がすつとです。」

阿保野論気と指導の兵隊がトラックを下りてみるとダブルタイヤの後輪に踏みつぶされた抗日パルチザンの兵隊がいた。すでに絶命していた。

「どげんしよう？とんでんなかことばしてしもうた！」

ブルブル震える阿保野論気二等兵であった。

駐屯から憲兵や将校が飛んできて真夜中にもかかわらず河川敷の空き地はサーチライトで照らされ大騒ぎになっていた。

「この男は抗日パルチザンの頭目だ。よくぞ見つけた！残りは満州方面にボートで行ったんだな！まだたどり着いてはおるまい。すぐ丹東に打電せよ！朝鮮人は泳げない！」

死体の顔を見るなり、警備担当の将校は命令を発し電信担当の兵士が大陸側に打電す

ることによって、鴨緑江に漂っている抗日パルチザンのボートが捕獲された。

阿保野論気二等兵に踏みつぶされた抗日パルチザンの男は金日成と言う頭目だった。

抗日パルチザンたちは頭目の金日成がトラックに踏みつぶされて死んだことは隠さねばならなかった。求心力のある頭目がいなくなればただの烏合の衆になってしまうのがこうした組織の常だ。

金日成を背後で操っていたソビエトのスターリンも報告を受けた。よもやこんなことでテロ計画がとん挫するとは思ってもいなかった。こうなったら代役を立てるしかない。そう考えたスターリンはKGBに命じて代役を探させた。担ぐ神輿は軽いに越したことはないので、できるだけ欲の塊でおつむが軽い奴を探して来いと命じた。優秀な人間に権力を持たせると自分の命が危うくなることをスターリンは懸念していた。

KGBはハバロフスク界限でふらふらしている朝鮮難民を捕らえてきた。この男に金日成を名乗らせパルチザンの頭目にして背後で操ることになった。

元祖金日成の顔を知るものは次々と粛清された。

担ぐ神輿は軽いに越したことはないが、馬鹿に権力持たせちゃなんねえことをソビエトが知る頃にはすでにスターリンも没していた。

日本軍も抗日パルチザンの頭目が死んだことは極秘にすることにした。こうした連中はカリスマ的なヘッドがいなくなるとザコ同士のつぶし合いが始まることを日本軍は読んでいた。

「よお、阿保野論気二等兵。たいそうな手柄を立ててくれたなあ。」
駐屯地に呼ばれた阿保野論気は中隊長からお褒めの言葉をたまわった。

「いろいろ事情があつてな、昇進には結びつかんが、褒美と言つては何だがハルビンでの松山座公演に君に行つてもらうことにした。任務ではなく慰労と捉えてくれたまえ。日本からよんだ料理人による特上の料理付きだ。どうだね。」

どうせ満州映画協会の小生意気な甘粕正彦に威張られるのだから、そんなもん誰が顔を出すか！と思つている中隊長だった。

「旨か料理と、ほんなごつ大層な褒美ありがとうございます。」
勲章や階級章などもらつても腹の足しにはならないと言おうとしたが思いとどまった。

中隊長も出世欲のない奴で助かつたと思つた。抗日パルチザン頭目を殺したのは自分達であると大本営に報告して手柄を得ることになった中隊長であった。

死亡事故を起こしたにも関わらず、相手が金日成だったので、今で言うならウインウインの関係となつてしまい、意気揚々と船で大連に向かう阿保野論気二等兵だった。

~~~~海軍では~~~~

陸軍が満州で何やら画策しているらしい。

海軍省ではこのところやけに動きがあわただしいので、このところ暴走気味の陸軍が海軍の目の届かない満州で何かやらかすのではなからうか？と疑っていた。

顔の知られた将校を送ることはできないので、できるだけ陸軍に面識がない人間を潜り込ませることにした。

その「潜る」を勘違いした呉の将校が、潜ることに關しては群を抜いて優れた人材がいると富井を推薦した。腕っぷしの強い人材も必要だろうと、退役して大阪第二空港にいるアンソンを呼び戻して帯同させること似た。この二人ではまともな報告は期待できないから、説博士に協力をお願いし、二人は説博士の満州視察の付き人を装うことにさせた。

〳〳満鉄本社〳〳

新京の満鉄本社にはたびたび満州映画協会の甘粕正彦がやって来ては無茶苦茶な要求を吹っかけていた。さも自分が満州国皇帝の愛新覚羅溥儀の後継者であるようなこと吹聴しては無理を押し付けていた。

甘粕正彦は小心者だったので、自分の横暴を大本営が疑っているのではなからうか？ならば、接待漬けで帰してやろうと、満鉄に特急アジア号を出すよう要求に来た。

当時世界最速の夢の超特急だったアジア号だが、満鉄ダイヤの過密化や不具合が相次いだことから運転はしていなかった。それなら豪華特別列車をしたと満鉄にねじ込んで、新人社員の屋島君が担当になったのだ。官民一緒の列車にすれば軍部も勝手には動けないので、プランを組めと屋島君に押し付けた。

屋島君は宮沢賢治の銀河鉄道の夜を思い出し、列車の名前に「銀河鉄道」と名付けた。が、機関車の識別番号はキリスト教の呪いの数字 666 だった。

新京の関東軍本部からはこの視察団の指揮官となった舞子売(まいこうる)中佐が一升瓶ぶら下げて満鉄に乗り込んできた。

「甘粕！貴様こんぎやとこで何ちよおすいとる(いばっている)！」
この男が来ると甘粕正彦はこそごとと逃げだすのだった。

「わしやこつすいやつが大嫌いじゃ！」
と湯飲みに日本酒を注いで屋島君に突き出した。

「なあんも心配せんでえだぎや。おみやあさんのやりたいようにせい。わしが責任持つ！」
と、舞子売中佐は湯飲みに酒を注いでグイッと飲み干した。

元々関東軍は日露戦争後に山海関の東側の「関東」と南満州鉄道の守備のために作られた関東都督府が前進の組織。満鉄とは切っても切れない縁がある。

「わしのおごりじゃ！みんな飲めえ！」
男気があるいい将校なのだが、この男が帰った後の満鉄事務所は酔いつぶれた社員が倒れる光景が広がる。

屋島君は様々な思惑を持って日本からやって来る人たちを受け入れるために大連へと向かった。

その頃、東シナ海では尖閣諸島に向かった支那の偽装漁船団が日本海軍の駆逐艦に砲撃を受けていた。

福建から大連を目指して秋田のネロさんと、重慶からくついついてきた犬の次男坊が乗り込んだ船がこの偽装漁船団の船だった。